

## 初級レベルにおける語彙習得のための練習

木村静子

## 1. はじめに

本稿は国際大学の初級クラス（レベル2から4まで）で行なった語彙習得のための練習の報告である。

国際大学は英語で専門の授業を行なう大学院大学であり、入学してくる学生の大半は日本語がゼロレベルである、卒業後日本に残って働く学生が多い、という事情のもとに、2年間でゼロレベルから日本で働くのに困らない程度の日本語力をつけるという方針でコース立てをしてきた。しかし、数年前より入学する前にある程度日本語を勉強してきた学生が少しずつではあるが増えてきたこと、また2年間で少しでも高いレベルまで学生の日本語能力を持っていきたいという日本語プログラムの願いもあり、日本語2（以下J2とする：初級約75時間終了時レベル）から始めて、日本語4（以下J4とする：中級前半レベル）で終わるコースを3年前に作り、筆者が担当することになった。

本稿で報告する語彙習得のための練習は日本語2-4のコースを立てた時から行なったものである。

## 2. コースの概要

国際大学は10月から6月迄の、各学期10週間の3学期制をとっている。

このコースで使用した教科書は、J2-J3までは“Japanese for IUJ Students”<sup>1</sup>、J4は「日本語でビジネス会話」<sup>2</sup>である。

秋学期に日本語のクラスを履修する学生は毎年約70~80名いるが、先にも報告したとおり、その大半は日本語1の学生であり、日本語2を履修する学生は10名前後である。

各コースは週に5コマ（1コマ90分）であり、1週間で1課を終わらせるペースで授業を進めた。

## 3. 語彙習得のための練習

## 3. 1. 背景

3年前に始めてこのコースを立て、担当になった時には学生は6名しかおらず、日本に来る前に日本語を多少勉強してきたので、文法はある程度わかっていたものの、聞く・話すはとても弱く、日本語2というよりは日本語1+ $\alpha$ という程度であった。従って、聞く・話すの二つの能力を伸ばすことに重点を置きシラバスを立てることにしたが、先にも報告したとおり本大学は専門の授業は全て英語であり、よって学内の共通語も英語である。従って、本人が強いて努力しなければ日本語を話す機会は日本語のクラスだけということにもなってしまう。それで、そのような環境の下、話すことが非常に弱いこの年度の学生のために、

- J2:とにかく何でも日本語で話し、日本語を話すということに慣れる  
J3:事実を述べるということに重点を置き話す  
J4:意見を述べるということに重点を置いて話す  
という目標を立て、1年間話す練習を行なった。

ところで、初級のコースは1週間に1課進んで行き、その課を導入する日に言葉のクイズを行なっている。課の初めにクイズを行なうのは導入時に言葉を覚えておいたほうが導入する事項がよくわかるだろうということからである。しかし、毎課 20~30の新しい言葉を覚えるのはなかなか大変なようで、クイズの結果も悪いし、文法導入の時にも言葉を覚えていないために、導入事項がわからないというようなことも以前はしばしばあった。更に、言葉を覚えていても、頻繁に使わない語は当然忘れてしまうためその語の定着も悪かった。そこで、語彙を覚えるのに役立ち、覚えた語彙が定着し、なおかつ話す練習になる方法ということでこれから述べる練習を行なうことにし、現在まで3年間行なってきた。<sup>3</sup>

### 3. 2. 語彙習得のための練習

これは簡単に言えば手持ちのカードに書いてある言葉を相手にあてさせるものである。

まず、その週に行なう課の新出語彙を、できるだけ名詞、形容詞、動詞などが混ざるように4~5のグループに分け、カードに書く。一つのカードにはだいたい4~5の言葉が書かれている。谷口他(1994)では初めに思いついた言葉を紙に書かせ、その言葉から連想する言葉を次々に60分間のうちで書かせたところ、最も頻度が高く表われた語は名詞との結果がある。このように、学生は名詞はすぐに出てくるのだが、動詞は覚えにくかったり、また言葉として出る頻度が少ないのではないかと思い、カードには必ず動詞も入れるようにした。

次に、学生をペアにさせ、各自に一枚ずつ言葉が書かれているカードを渡す。ペアの学生は違うカードを持っている。

そして、一人の学生が手持ちのカードに書いてある言葉を相手にあてさせるため、その言葉の意味や反対語、また例文などを言うのである。例えば、やさしいところでは、カードに「安い」という言葉が書かれていた場合、「これは高いの反対の言葉です。」と言ったりする。また、「乗り換える」と言う言葉がある場合には「浦佐から新幹線で東京まで行って、そこで成田エクスプレスに乗ります。私は新幹線から成田エクスプレスにどうしましたか?」というようなことを言った学生もいた。また、初めに「これは名詞です」とか「これは動詞です」と言ってヒントを与える学生もいた。

このようにしてお互いの手持ちのカードの言葉をあてたら、カードを変え、外の言葉を同じようにして当てていくようにした。この際、学生には習った文型をできるだけ使うように指示した。時間の都合上、1課に一回しかこのタスクはできず、一回に15分くらいかけて行なった。

### 3. 3. アンケートの結果

このタスクは先述の通り 3 年前から行なってきたが、J3 が終わった時点（初級終了時点）で、今回初めて学生にアンケートを行なった。<sup>4</sup> 学生数 13 名のうち回答数は 8 名で、数としては非常に少ないが、結果は以下の通りである。なお、このタスクはクラスでは「言葉の練習」と呼ばれていたため、アンケートでもその言葉を使用した。

まず、言葉の練習は役に立ったかどうかという質問では、8 名のうち 6 名が「役に立った」、2 名が「役に立たなかった」と答えた。

「役に立った」と回答した 6 名に、どんな点で役に立ったと思うかと質問したところ（複数回答可）、「話す練習によかった」、「言葉を覚えるのに役に立った」、「言葉の使い方がわかった」などの回答があった。

では、「言葉の練習は役に立たなかった」と回答した 2 名に、どんな点で役に立たなかったかを質問したところ（複数回答可）、「話す練習にはならない」、「言葉を覚えるのに役に立たない」という回答がそれぞれ 1 名ずつあった。

しかし、今後言葉の練習を続けたほうが良いと思うかという質問では 7 名が「続けたほうがよい」、と答え、1 名が「続けても続けなくてもどちらでもよい」と答えた。<sup>5</sup>

続けたほうがよいと答えた人に、では、どうして続けたほうがよいと思うかと質問したところ（複数回答可）、ほとんどの学生が「役に立つ練習だから」と回答した他に、「この練習はおもしろい」、「新しい言葉を学ぶのに効果的な方法だ」、という回答もあった。また、「続けたほうがよいと思うが、やり方を変え、課の初めと終わりの 2 回やったほうがよいと思う」、という回答もあった。

「続けても続けなくてもどちらでもよい」と答えた学生は、続けたほうがよい理由としては「役に立つ練習だから」と答えたが、続けなくてもよい理由としては、「この練習が好きでないから」、と答えていた。

言葉の練習が好きとの答えはゼロだったので、学生はこの言葉の練習について、好きではないが話すことや言葉を覚えるのに役に立つと考えていて、今後も続けたほうがよいと思っていることがこのアンケートの結果からわかる。

### 3. 4. この練習を行なって効果があった点と今後検討すべき点

このタスクを行なってみて効果があったと思われる点と、検討しなければならない点を挙げてみる。

まず、効果があったと思われる点は以下の通りである。

- ① この練習をすることによって、言葉が覚えられたかどうかという点についてだが、今年度は課の導入をする前にこの練習を行なったため、導入時にはだいたい言葉を覚えていた。言葉を覚えていたということで、導入事項も割合スムーズに受け入れられたと思う。また、統計はとっていないが、言葉のクイズも例年よりよかったと思う。

倉八(1996)では、「文脈全体の理解によって語句の意味を推定する」処理過程を TOP-DOWN 処理と言い、「TOP-DOWN 処理によって語句を習得した場合に、単に辞書の意味によって覚えた場合よりもよりよく保持される…」(P217)と書かれている。この語彙練習は、ヒントを与える側はその語句がどのような状況で使われる

かを考えなければならないので、使われる状況を自分で作ることで、より一層語句の習得が促されるのではないだろうか。また、ヒントを聞いて答える側は文脈から判断して言葉を類推するので、単に語彙リストを見て覚えるよりは覚えやすいのではないだろうか。

- ② 目的の一つである話す練習という側面の効果については、与えられた言葉についてその反対語や意味を述べるという点では、自由に思っていることを話すのに比べて制約はあるものの、自発的に話す練習にはなったと思う。しかし、制約があるといっても、会話練習の時に行なうような骨組みを与えられて置き換え練習をするものとは違うので、よく話せる学生は発話量も多くなり話す練習になったのではないかと思う。
- ③ 文法知識とその運用という側面の効果を考えてみたい。言葉の練習をする前に、「今日はこの文型をなるべく使って練習してみましょう」と言って練習させるようにしたので、既習の文型を使う練習になったと思う。また、学生同士の練習を回っている時に、やさしい文型を使って話している場合など、「XXのパターンを使ってみるように」というようなサジェスションも与え、できるだけ既習の文型を使わせた。従って、学生は既習の文型が、自分の言いたいことの中でどのように使われるのか理解できたのではないだろうか。
- ④ 教師側にとって参考になったことは、語彙の指導をする際には訳と日本語の意味の違いに気をつけなければならないということである。単語リストに言葉の意味が英語で与えられているので、学生はその英語の意味を見てヒントを与えているのだが、そのヒントを聞いていて、使われかたが違うことに気づくことがあった。例えば「上司」という言葉の訳として“one's boss, one's superior”となっていた。その“one's superior”を見て、ある学生が「学長は私の何ですか」という質問をした。また、「表紙」の訳として“cover”となっていたのだが、ある学生が「寝る時、ふとんの一番上のもんです。」とヒントを与えていた。このように英語と日本語の意味のずれや英語の意味だけに頼る危険性などが学生が与えるヒントによってわかった。

ここで、学生が与えるヒントについて少し触れてみたい。ある語句を紙に書かせ、その語句から次の語句を連想したのは何によるかを面接で聞き、語彙のネットワークが学習者の中でどのように形成されていくかを報告した谷口他(1994)では、その連想の契機は「意味、漢字、発音、エピソード、イメージ、その他という6つのカテゴリー」に分類され(P84)、初級はエピソード、つまり個人の記憶に基づく連想が強く、中級は概念体系を記述する傾向が強いという結果であった。

本稿で報告している語彙練習で、学生が与えるヒントを聞いていると、J2の初めの頃は谷口他(1994)が分類するところの意味(1.同意・類義語 2.反意語 3.属性 4.所有・存在 5.共起関係 6.上位概念 7.下位概念 8.同格・同類)の中の1.同意・類義語 2.反意語 3.属性 4.所有・存在が多かった。例えば「むすこの反対は何ですか」や、「この教室の前にあります(黒板)」というようなものであった。

レベルが上がるにつれて、場所などは連体修飾を使って「手紙を出すところです」というような文になってきたが、その言葉の定義を日本語で言うのはなかなか出てこなかった。

名詞では当然のことながら、抽象名詞はヒントが出しにくそうであったし、形容詞

に比べて動詞のヒントを出すのが難しそうであった。

- ⑤ この練習の効果としてクラスの雰囲気作りという点もあった。日本語のクラスは朝の1限目にあり、起きてすぐクラスに来たという学生がほとんどであるため（ほとんど全員が寮に住んでいるため）、朝のクラスはどうしても活発でなくなる。この練習はペアを変えたりして行なうのでクラスに動きができること、また相手のヒントで答えを考えるため頭が動き出すのかこの練習の後ではクラスに活気が出た。

次に、検討すべき点を挙げる。

- ① この練習をいつ行なうのかということについて検討しなければならないと思う。昨年度までは必ずしも課の初めにしていたわけではなく、課の前半の時間のある時にしていたが、今年は単語クイズの前に行なった。これは、先述したように、言葉を覚えるのに役に立つだろうということと、文法事項を導入する際、学生が言葉を覚えていたほうが導入の説明などがわかりやすいのではないかと思ったからである。その結果、クイズも例年よりよかったように思うし、また導入事項がわからず学生が混乱することも見られなかったのであるが、課の初めということで、この練習のカードを渡すと皆一斉に言葉のリストを出し、ヒントを出すほうも答える方も言葉のリストを見ながら行なっていた。学生が全員言葉のリストを見ながら行なうというのは昨年度まで見られなかったことであるし、また、アンケートの中にも、練習する際、単語リストの中から言葉を探すのに時間がかかってしまったというコメントもあった。従って、この言葉の練習を行なう時期を、練習に時間がかかってもよいから課の初めに行い言葉を覚えるのに役立つためにするのか、または、覚えてきた言葉をこのような練習を行なって強化するのか、あるいは、学生のコメントにもあるように一度きりではなく初めと終わりに二度するのか、といったように、この練習の目的とその目的を達成させるための練習時期を考えなければならない。
- ② 練習のやり方という点についても考える必要がある。学生がペアになって話す練習などをする場合に常に生じる問題なのであるが、この練習でも、学生同士の話す・聞くの能力差が大きい場合、聞く・話すが弱い学生は、相手が長い文を使って話しても理解できなかつたり、相手に気後れしているようなところが見られた。また、話したり聞いたりがよくできる学生の方は、相手に物足りなさを感じているのがわかった。ペアにさせて練習する場合、話すレベルが同じくらいの人と組ませたほうがよいのかどうか、また、レベル差がある場合にはどのようにしたら効果的にできるかなどを考えなければならないと思った。

### 3. 5. 終わりに

以上、J2-J4で行なった語彙の習得を図る練習の報告を行なったが、今後の課題として以下のことを記して終わりとしたい。

まず、この練習を行なうにあたって、次の2点が課題になる。

- ① 練習を行なう時期を考えなければならない。学生のコメントにもあったように、一課に一度だけでは言葉の習得には不十分であると思われるので、課の初めに行なう、言葉を覚えるための練習だけではなく、復習のための練習も行ない、語彙の定着を図り

たい。

- ② 学生が与えるヒントが、同意、類義語や反対語のみではなく、概念的なものまで持っていくように指導したい。また、レベルが上がるにつれて、例えば「この言葉は XX すること・ものです」のように定義まで言えるように指導する必要がある。  
次に、この語彙練習を通して、次のようなことを調査したいと思う。
- ③ 学生が与えるヒントがレベルによって、文構造がどのように変っているかを調べる。また、谷口他（1994）にあるように、ヒントが上位概念や下位概念までに広がるのかなどを研究し、レベルの発達とヒントの関係について調べてみたい。

#### 註

- 1 “Japanese for IUJ Students”(Part 2 & 3) (試用版) Japanese Language Program, International University of Japan.
- 2 「日本語でビジネス会話」－中級編－ 日米会話学院
- 3 このタスクは筆者が国際大学で夏の英語集中講座（会話クラス）を受講していた時に、担当の英語教師が行なった英語の言葉あてタスクをヒントに行なったものである。
- 4 学生に実施したアンケートと結果は本稿の最後のページに掲載。（ ）の中は結果である。
- 5 「言葉の練習は役に立たなかった」と答えた 2 名のうちの 1 名が、「課の初めと終わりの二回この練習をする、というようにやり方を変えて、今後も続けたほうがよい」と答えた。

#### 参考文献

- 倉八順子 （1996）「語句の指導」『日本語学』15（8）：215-222.  
谷口すみ子他（1994）「日本語学習者の語彙習得－語彙のネットワークの形成過程－」『日本語教育』94号：78-91.

<Questionnaire>

- 1 Do you think 「ことばの練習」 is useful?
- a: YES →please answer to question 2 (6名)  
b: NO →please answer to question 3 (2名)
- 2 In what points 「ことばの練習」 is useful? You can choose more than one.
- a: good for speaking practice (4名)  
b: good for memorizing vocabulary (4名)  
c: good to know how to use vocabulary (3名)  
d: others ( )
- 3 Why do you think 「ことばの練習」 is useless? You can choose more than one.
- a: 「ことばの練習」 is not good for speaking practice (1名)  
b: 「ことばの練習」 is not good for memorizing vocabulary (1名)  
c: 「ことばの練習」 is not good to know how to use vocabulary (0)  
d: others ( )
- 4 Do you think it is good to continue practicing 「ことばの練習」?
- a: YES →please answer to question 5 (7名)  
b: NO →please answer to question 6 (0)  
c: I do not care either YES or NO (1名)
- 5 Why do you think it is good to continue? You can choose more than one.
- a: because it is interesting. (1名)  
b: because I like 「ことばの練習」 (0)  
c: because I think it is useful practice. (7名)  
d: others ( )
- 6 Why did you answer "No" to the question 5. You can choose more than one.
- a: because it is not interesting at all.  
b: because I do not like 「ことばの練習」 (1名)  
c: because I think it is useless practice.  
d: others ( )
- 7 Please write any comments.